

令和5年度 理科の夏休み課題（小論文）

今回、2011年から2021年までの11年間に、5つの高校で収集した小論文の中から15編を選びました。そして、それらの小論文を皆さんに読んでもらった上で、1つの小論文を選んで、以下のA～Cの課題についてあなたの思いや考えを書いてもらいました。

- A**：あなたの選んだ小論文の筆者は、どういう思いでこの文章を書いたと思いますか？
B：あなたが共感したのはどういう所ですか？
C：あなたが選んだ小論文を読み、これからあなたができることを述べなさい。

なお、小論文を1つ選ぶ時の参考として、15編の小論文を内容別に、4つに分類しています。

『体験』：被災体験と伝承

『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災

『支援』：国際支援・国際交流

『生き方』：これから私ができること

提出してもらった中から、「そんな思いもあるんだ」や「そういう視点もあるんだ」という内容の代表的な小論文を、皆さんにもお知らせします。（選んだ小論文も添付）

(1) ①（令和5年度宮古水産高校1年 Mさん）（震災当時、3才）

A：「筆者は、どういう思いでこの文章を書いたのか？」

筆者は、東日本大震災が起こったことはとても悲しい出来事だけど、自分の思い出の中で生きていてほしいという考えや、自分の手で町の魅力を伝えたいという考えなど、自分自身ができる気持ちや行動が大切だという思い。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私が共感したのは、「たとえ亡くなっていたとしても、私の思い出の中で生きていてほしい」という所です。この文章は、生きている人全員に言える言葉だと思ったし、自分もその気持ちを大切にしないといけないと思ったから。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

小論文を読み、共感した部分でもある『自分の思い出の中でずっと生きてほしい』から、亡くなった人のことを思い出すことが、これから私ができることの1つである。

また、自分の命を自分で守ることができるための訓練などを積極的に行ったり、防災リュック等を準備する必要があると思う。自分の命を守れなければ、人の命を守ることはできないと思うので、できることは何でもしたい。そして、1人でも多くの命に助かってほしい。

これから先、何が起こるか分からないけど、親からもらった命に感謝して、一日一日後悔のないように自分らしさを忘れずに生きてゆきたい。

②（令和5年度宮古水産高校1年 Sさん）（震災当時、3才）

A：「筆者は、どういう思いでこの文章を書いたのか？」

田老の魅力を伝えていきたい思いや、「田老を語る会」を通して、津波を体験したことがない人へ被災状況や当時の様子などをこれからも伝えていきたいという思いで文を書いたと思う。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

「家族を2人亡くしました」と書いてあって、自分もお婆ちゃんを亡くしているので凄く共感したし、自分は当時3才で「そのことがよく理解できずにいました」という所にも共感した。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

これから私ができることは、東日本大震災のことを忘れずに、実際に震災を経験していない人に当時のことを教えていくことや、また津波が起こった際には自分の命を守ることも大切だと思いました。

町の魅力を伝える事は自分には難しいことだけど、地域の行事などに家族や地域の人達と一緒に参加して、盛り上げたりしようと思います。また、自分は写真を撮ることが趣味なので、もっと技術を上げて磨いてたくさん写真を撮り、町の魅力を伝えていきたいと思います。誰かの記憶や思い出に残るような写真を撮ることが、これからの自分にできることであり、していきたいことです。

選んだ小論文(震災当時、小1)『東日本大震災から十年目の今、私ができること』(体験・生き方)

東日本大震災から10年が経とうとしています。私は小学生の時、未来の田老を題材にした劇をしました。中学生の時は、「田老を語る会」をしました。「田老を語る会」では、被害状況や当時の様子・教訓などを、津波を経験したことのない人に伝えました。私ができることは、考えて、伝えていくことです。「田老を語る会」は、現在の中学生も行っています。私はそれをこれからも続けていってほしいと思います。

私は震災で家族を2人亡くしました。当時まだ小学校1年生だった私は、そのことがよく理解できずにいました。ずっと2人の帰りを待っていました。そのことを思い出して泣くことが時々あります。亡くなった人のことを思い出すことも私にできることの1つです。たとえ亡くなっていたとしても、私の思い出の中で生きていてほしいと思うのです。

私は絵を描くことが好きです。昔から絵で好きなものを表現することが好きでした。私はいつか、もっと絵を描く技術を上げて綺麗な田老の海を描きたいと思っています。現在の田老はお店は建ってきましたが、まだ人が少ないと思います。田老の魅力を知り、それをたくさんの人に広めてほしいと思います。私も自分の絵で田老の魅力を伝えられるように、田老の事をより好きになりたいです。

(2) (令和5年度宮古水産高校2年 Tさん) (震災当時、保育園年少)**A:「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

地震や津波はいつ起こるか分からないから、常に備えておく必要がある。東日本大震災の中で起こった出来事を次の私達の世代に伝える事で、もう二度と同じまちがいをしないようにする大切さを伝えたい、という想い。

B:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

地震や津波が起こった事を記憶から消さないように、次の世代に伝える。その中で幅広い年代に伝わるように歌で歌い継ぐこと。また、博物館などに記録を残すことで、実際に見る事ができるというところ。

C:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

様々な国や地域で災害は必ず起きてしまう。だからこそ、その起きた出来事を記憶から消して忘れてしまうのではなく、あったことの隅から隅まで記録に残すことが大事なんだと思う。また、残すだけではなく、次の世代に引き継ぐということも大切なんだと思う。

これから私ができることは、津波の恐ろしさを知り、それを語り継ぐことである。この著者が言うように、「伝える」ことを大事にして災害や津波について話す活動に積極的に取り組んでいきたいと強く思った。受け継いでもう二度と同じ悲しみをしない、させないようにしたい。

選んだ小論文(震災当時、小4)『インド洋大津波や東日本大震災を後世に伝える方法』(体験)

2018年は、記録的な気象現象や地震によって災害が相次ぎ、西日本豪雨や大阪北部地震・北海道胆振東部地震など、自然災害が多かった年でした。八年前私達は大きな地震を体験し、地震後さらに恐ろしい津波の被害を受けました。

『生物』の授業では、インド洋大津波と東日本大震災の比較について、小笠原先生が実際に被災地を訪れ、見たものや感じたものを教えて頂きました。インド洋大津波と東日本大震災で共通しているのは、やはり伝承を後世に残す重要性です。インドネシアでは、津波のことを忘れないように工夫が施されていました。たとえば、津波のことを伝承歌謡にし、韻を踏み覚えやすくすることで、幅広い年齢の方々に親しみやすくし、歌い継ぐことで後世に伝承することが可能になっていました。また、日本で見たことがなかったのは、津波博物館でした。その博物館には写真はもちろん、津波を経験した方から直接話を聴けるスペースがあり、多くの人に知ってもらうことが可能でした。また、津波を経験した人の記憶も、風化することがなくなるのではないかと思います。ですので、私は、「歌」や「博物館」の二つの方法を用いることで、東日本大震災を後世に残せると考えました。そして、震災を経験した私達は、「伝える」ことを大切にし、いろいろな工夫を加えながら積極的に活動していくべきだと強く思いました。

(3) ① (令和5年度宮古水産高校1年 Sさん) (震災当時、3才)**A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

筆者は、紛争が起きていたり、飢餓に苦しんだりしている人がいるという状況に国際協力が必要だと強く思ってこの文章を書いたのだと思いました。さらに、理解することから支援につながる、ということが良いと思いました。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私が共感したのは、紛争や飢餓で苦しんでいる人に支援が必要なのはその通りだけど、震災などが起きたとしても、それは同じだということです。命が尊いのは日本も含めて世界中全ての人達だということが伝わってきました。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

今回選んだ小論文を読んで、すごく共感できたし、自分の夢を大事にしようと思うことができました。「力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていく」という文章が、自分の気持ちの持ち方を変えられたんじゃないかと感じられました。貧困はアフリカなどで多く、将来は貧困や飢餓関係の仕事に就きたいと思っています。たくさんの命が失われていくことが増えているけど、その逆に、命を助けて誰かを笑顔にしたいです。小論文を読んでできることは、知識を得たり何かをしようと思意識することのきっかけだと思うので、私はそれ以上に今後の自分の将来のために努力し、支援なども率先して行い、平和な世界につなげたいです、

② (令和5年度宮古水産高校1年 Gさん) (震災当時、3才)**A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

たくさんの物資を与えることも大切だけど、それ以上に一人一人の想う気持ちが一番の支援で、安心であるということ。それを伝えたい、広めたい、みんなに考えてほしいという想いを込めて書いたと思う。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

力になりたい、助けたい、と想う気持ちこそが大切だということ。物資ばかり与えている今の日本を不思議に思っていたから、気持ちが大切とはっきり書いている著者に心を打たれ、共感した。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

今の生活が当たり前だと思わずに生活することと、自然災害についてしっかりと知識と理解を深めようと思う。自然災害は当たりの生活や人生をも一瞬で消してしまうものだから、それを理解し伝えられるようになりたい。そして、今自分は、被災地や生活困難な場所に直接的に関わることが難しいから、間接的にでも協力したり、その場所を想う気持ちを持ったりしたいと思う。たくさんの国々が様々な問題や災害を抱えていると思うから、それらを助けることや協力する気持ちを一番持っていたいなと思います。他人事だと思わずに、常に災害に備えようとすることを考えたい。

選んだ小論文(震災当時、高2)『私が考える(できる)国際協力や支援活動』(体験・支援・生き方)

私が考える国際協力とは、ただ物資を送るということではないと思う。お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力なのではないかと考える。

今、世界では紛争が起きていたり、飢餓で苦しむ人がいたりたくさんの問題を抱えている。そして、3月11日に東日本大震災が起き、支援が必要な人が大勢いる。大震災を経験し、人の命の尊さ、今までの自分の生活がどれだけ贅沢だったかなど様々なことを考えさせられた。中でも強く思ったことは、協力し合うことの大切さだ。避難所にボランティアに行ったおり、外国のボランティア団体も多く見かけた。その中の1人がおばあさんの肩をもみ「僕らがいるよ」と片言で話しかけていた。そしておばあさんが「力になりたいって思ってくれることが一番うれしいよ」と言っていた。私はその通りだと思った。確かに、物資の支援がとても大切で、物資がないと生きていけない人もたくさんいると思う。でも、力になりたい、助けたいと思うことが支援される側も一番嬉しいと思うし、その気持ちが一番大切なことだと思う。力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていくので、その気持ちを持つことが大切だ。

世界には、まだまだ知らない問題があると思う。私は問題を知り、理解することから支援につなげていきたいと思った。

(4) (令和5年度宮古水産高校1年 Hさん) (震災当時、3才)**A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

東日本大震災のような大きな災害が起こり、家族が亡くなったり、町が変わり苦しい日々が続いていたけど、地域の人やボランティアの人達にたくさん支えられたから震災を乗り越えることができたという想い。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

筆者と同じように、私もすごい人見知りで知らない人と話したり人と接することが苦手です。しかし筆者は、多くの人に支えられたから自分も多くの人を助けたいと思うと言っている部分に共感しました。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私も東日本大震災が起こった時、山田町に住んでいました。3才だったからあまり覚えていないけど、避難する時や避難した後の避難場所ではたくさんの人に支えられたと思います。今までは、筆者と同じように人見知りなのでボランティアなどに参加していなかったが、自分を支えてくれた人はたくさんいると思うから、地域のボランティアや様々な活動に積極的に参加していきたいです。また、普段の生活で困っていそうな人がいたら勇気をもって話しかけたりして、普段から誰かの役に立つようなことをできるようになりたいです。

選んだ小論文(震災当時、小6)『3.11から5年を経た今、私ができること』体験・支援・生き方

震災当時、私はまだ幼かった。町では煙があちこちから立ちのぼり、店や家などは跡形もなく崩れ、本来の山田町の姿ではなくなっていた。また、私はこの震災で母を亡くし、前に進むこともできないままとなった。そんな時、私を支え、励ましてくれたのが、家族、友人、他の県の方々、そして外国からの支援だ。

たくさんの方々から支援され、その中で一番心に残っているものは、手紙だ。手紙には励ましの言葉などが書かれており、そのおかげで辛く苦しい日々を乗り越えることができた。また、地域の方々ともお互いに支え合いながら過ごすこともできた。

震災から五年が経ち、私は今、高校3年生となった。この五年間は長いようで短い日々でもあった。そして、私がこの五年間で一番学んだことがある。それは、人の大切さだ。私はもともと人見知りで、人となかなか接することができなかった。しかし、多くの方々に支えられていると気づき、そこから私も恩返しのために多くの方々に助けたいと思い、一年生から三年生まで、町で行われているボランティア活動に積極的に参加した。ボランティア活動に参加したことによって、子供からお年寄りまで幅広い年代の方と接することができ、人と接することが好きになった。

元の山田町に戻ることはまだ時間がかかるけど、復興することを信じ、人のために生きていきたいと思う。

(5) (令和5年度宮古水産高校2年 Kさん) (震災当時、保育園年少)**A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

初めは少し興味があるだけで、学生なんかに出来ることがなく自分には関係のない話だと思っていたけど、調べてみると自分にも出来そうな事を見つけて深く興味が湧いたのだと思う。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

高校生が国際支援なんて、と読む前は思っていたが、身近につながるものが多くあって、他の人にも教えたくなるようなことが多くあった事。ハガキ250枚で1人の子が学校に行けるとなると、想像以上に価値があると思った。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

書き損じハガキや絵本など捨ててしまうような物で、他の国の子供達が学校に行けるようになるなんて思ってもいなかったの、そういう活動があったら積極的に取り組んでいこうと思いました。

高校生が国際活動をしているという事実をもっと多くの人が知ってくだされば、どのような世代でも国際活動は出来るんだと思ってもらえるので、SNS等を通じて広めていければ良いと思います。書き損じハガキや絵本以外にも、国際支援につながる物は身近にたくさん溢れていると思うので、これからどんどん発展させていきたいと思っています。

選んだ小論文(震災当時、小2) 『私ができる国際支援活動』**支援**

国際支援活動という言葉が高校生になってから聞く機会が増えました。私も少し興味がありましたが、学生の私にできることがあるのだろうか、という考えから自分には関係のないことだと思っていました。

調べてみると、私にもできそうなこともありました。書き損じハガキ、使用済み切手、絵本を集めたり、募金などです。書き損じハガキ集めは岩泉高校も取り組んでいる活動ですが、私は一度も参加したことがありませんでした。しかし、書き損じハガキは私が想像していた以上の価値があることを知りました。タイやラオスでは250枚で子どもが一人、一年間学校に行くことができるそうです。岩泉高校の生徒全員が一人2枚ハガキを集めれば、一人の子どもが一年間学校に通うことができるということになります。岩泉高校はとても素晴らしい活動をしていると思いますが、私たちに書き損じハガキについての知識がないため、集まりにくいのだと思いました。国際支援活動について知る機会が増えれば、書き損じハガキなどの活動に協力してくれる人も増えると思います。絵本なども貧困地域では貴重な勉強道具になります。捨てる前に、寄付しようと思います。

今回、国際支援活動について調べて、自分にもできることがあることを知りました。できることから協力していこうと思います。また、他の人にも広めていきたいです。

(6) (令和5年度宮古水産高校2年 Kさん) (震災当時、保育園年少)**A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

森が私達にどのようなものを与え、どれほど大切にされるべきかをしっかりと考える。また、世界中に津波の恐ろしさ、大変さ、苦しみを体験者が伝える。この2つが重要だという想い。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

防潮堤のような人工物は津波を連想させるので、人工物ではなく自然の物を使って防災することが良い、という意見に共感した。人工物ではないからこそ、人の命を守れることもあるかも知れないと思った。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

津波の恐ろしさ、大変さ、苦しさをテレビやSNSを通じて日本だけではなく世界に発信し、より多くの人に伝えること。そして、それらをふまえて、今後の防災・減災について考え、また津波が来た時に被害を最小限に抑えられるように努力することができると思った。

特に二つ目のことをするのは大切だと思う。津波の被害に遭った先人達が、「これから先、同じような事が起きても被害を抑えられるように」と残してくれた事や物を活用し、彼らの想いを無駄にしまわれないように、今を生きる私達が頑張らねばならない、と思った。

自然に起こる災害は咄嗟に対処がしにくいというえ、次に何が起きるのか予想が難しい。だからこそ、防災・減災の活動や、日頃からの準備をしておくことが何よりも大切である。

選んだ小論文(震災当時、小2) 『身近な自然環境を活用した津波への防災・減災』 **体験・環境**

津波を体験した日から、もう長い年月が経ちました。私自身、津波が起こした被害の大きさなどが記憶から薄れていっています。今回この記事を再度読み、新たに感じさせられるものがありました。まず、森がどれ程大切かについてです。森が減ることは二酸化炭素が増えることだから嫌だと思っていました。でも森はそれだけではなく、海の生態系にも大きく関わっています。海へ栄養を与えているのは森でした。森がなくなってしまうと、海の生態系に大きな影響を与えるでしょう。そうすれば私たち人間も困ります。そして森はそれだけでなく、防災・減災にも役立っています。津波が起こった場合、一時的に被害をやわらげ人々や町を守ってくれます。そのため、木を切る行為は、津波の被害を増加させるのと同じ事だと思います。私達山田町の防潮堤は、もしかしたら津波を思いだして嫌になる人もいると思います。だから、森などの自然環境を付け加えるなどの工夫をすれば良いと思います。

森が私達にどのようなものを与え、どれほど大切にされるべきなのか、山等を開発する前にしっかりと考えるべきではないのかと思います。また、日本だけではなく世界中に津波の恐ろしさ、大変さ、苦しさを、私達体験者が伝えていくべきだと思います。

(7) (令和5年度宮古水産高校2年 Sさん) (震災当時、保育園年少)**A:「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

東日本大震災を経験し、震災のことを考え備えるということが大切だ、少しでも困っている方の為にボランティアをしたい、どの世代にも震災について興味を持ってほしい、という思い。

B:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

教育テレビなどで、子供にも分かりやすいようにアニメを作ったり、どの世代でも興味を持てるように工夫したCMを作っていくこと等が大切になる、というところです。震災を知らない子供達に知ってほしいからです。

C:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

小論文を読み、共感する部分が多くありました。いつ来るか分からない震災に備えて、避難場所や食糧などを準備しておきたいです。ボランティアの面では、宮古水産高校食物科として、炊き出しなど、少しでも力になると思うので、積極的にボランティアに行きたいです。

また、東日本大震災を知らない、体験していない子供達に、このようなことがあって何人もの命が失われたという事実を伝えていきたいです。そのまま伝えることは大切だけど、幼い子供達にとっては怖いと思うので、柔らかめに工夫することも良いと思います。

学生にできることは1つでも多く協力していきたいです。

選んだ小論文(震災当時、小6)『3.11から5年を経た今、私ができること』体験・支援・生き方

3月11日から五年経ち、この地震、津波を経験し、備えると言うことが大切だと感じました。当時は、そのような事が自分の周りで起きるなんて考えてもいませんでした。停電や食料不足など、苦痛な数日間を過ごしたので、もしもの事を考えて準備する必要があると感じました。

「ここなら大丈夫だろう」と自分勝手な判断をしていると、いつか大変な目にあってしまうと思います。避難をしろという放送があった場合、迷わず、できるだけ早く避難することが大切だという事を学びました。

東日本大震災では、多くの方がボランティアで募金をしてくださったり、炊き出し等たくさんの方の援助をして下さりました。私だけではなく、とても感謝している方々がたくさんいらっしゃると思います。数ヶ月前、熊本県でも大きな震災がありました。少しでも困っている方の為にボランティアに行きたいと強く思いました。

この震災で学んだ地震や津波の怖さを忘れず、反省すべき点を反省し、自分の命を自分で守ることができるために訓練などを積極的に行っていく必要があると思います。そして、それらを伝えるために、教育テレビなどで子供にも分かりやすいようにアニメを作ったり、どの世代にも興味を持てるように工夫したCMなどを作っていくこと等が大切になると思います。一人でも多くの命を救えるよう、今できる事を精一杯頑張っていきたいと思います。

(8) (令和5年度宮古水産高校2年 Sさん) (震災当時、保育園年少)**A:「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

二度とこんな惨劇を起こさないように、そして今を生きることの大切さを伝えるために書いたと思う。当たり前前に生きていることがとても素晴らしいことを伝えるために、この文章を書いたと思う。

B:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

自分が共感したのは、「明日やろうと思っていたことができなくなった」という所だ。なぜなら、明日が絶対来るという確証がないからだ。今やれることは今やる。後悔しないためにも今という時間を生きていたいと思ったから。

C:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

今、自分ができることは、過去の経験や体験を活かして、今後どう行動すべきか良く考えること、そしてなにより今を一生懸命に生きることだ。著者が語っていたとおり、今を一生懸命生きることが、亡くなった人たちへの弔いになると思った。そして、このことを後世に伝えることが、今自分にできることだと思う。

二度とこんな惨劇を繰り返さないためにも、経験したことを学習して今に活かすことが大事だと思う。小さい子にも、劇にしたり本にしたりすれば、分かりやすく伝わるし、誰にとっても分かりやすい伝え方だと思う。

選んだ小論文(震災当時、中2)『3.11から四年目の今、私ができること』 **体験・生き方**

東日本大震災から今日まで、様々な節目で「今の自分にできること」を考えました。その末に辿り着いたのは、「今を一生懸命生きる」ということです。具体性がない、と言われるかもしれませんが、私はこれが「今の自分にできること」であり、「やらなければいけないこと」だと思います。

震災で私たちは多くのものを失いました。未だに戻ってこないものも沢山あります。「明日やろう」と思っていたことができなくなりました。「当たり前だ」と思っていたことの大切さに気がつきました。今、生きているということが、どれだけ恵まれているのかを感じました。それゆえ、私たちは何をやるにせよ、この一瞬一瞬を全力で生きていかなければならないのです。震災により命を落としてしまった方々の分も、有意義な人生を送らなければなりません。

私たちが今を懸命に生きることは、将来の社会貢献にもつながります。震災での経験を活かし、未来を創り上げることができるのは私たちです。しかし、「一生懸命」というのは決して簡単なことではありません。辛いときも疲れてしまうときもあると思います。そういう時こそ、東日本大震災を振り返り、忘れないようにすることが大切だと思います。

震災前、当日、直後、全てを知っている私たちだからこそ創り上げることのできる未来を、一生懸命築いていきたいと思っています。復興に役立つ人間に成長していきたいです。

(9) (令和5年度宮古水産高校1年 Yさん) (震災当時、3才)**A:「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」**

津波のことをたくさんの人に知ってもらいたい。後世に残せる形で伝えていかなければならない。つまり、津波を見たことがない人達にも自然の怖さ、命の尊さを伝えたいと思っていた。

B:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

「文化は違っても『思いやり』や『助け合い』の精神は、どこにでも同じく存在している」の所にとっても共感した。外国でも、他の県でも、助けたいと思っている人はたくさんいる。

C:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私は、東日本大震災で大切な人を亡くしました。その時私はまだ3歳。津波なんてまだ分からず、なぜ急にいなくなってしまったのかと、そう思っていた。少しずつ大きくなっていくにつれて、自然の怖さや被災の状況、そして昔と同じ姿の町にするためにずっと頑張っている復興活動。それらについて知ることができたのは、小学生や中学生の時に、おばあちゃんや親など教えてくれる人がいたからだ。自分自身が津波を体験したわけではないけど、津波の事についてたくさん知り、「自然は怖い」ということを知ることができた。だからこれからは、私達が「自然の怖さ」や「命の尊さ」について伝えていかなければいけない。まだ何も知らない妹には、早く話したいと思っている。

選んだ小論文(震災当時、中1)『3.11から三年目の今、私ができること』 **体験・生き方**

現在、私達がすべき復興への手助けは、一番はまず「伝える」ことだと思う。アチェの地にある『津波博物館』や、『ノアの方舟』で助かったガヤさんの語り部としての活動のように、後世に残せる形で伝えていかななくてはならないと思う。私は中学3年生の時、近い将来に大地震や大津波が来ると言われている和歌山県に、被災地の学校の代表の一人として講話をしに行ったことがあるが、やはり私達が身をもって痛感した悲しみや辛さ、震災への備え方は、できるだけ広める必要があると思う。

二番目は、「切り換える」ことだと思う。アチェの人々は、大災害を神様の恵みとして受け止め、プラス思考で前に進んでいる。「日常への感謝」や「たくさんの人との出会い」は、あの災害があったからこそ在るのである。命や大切なものもたくさん奪われたが、得たものも少なくはない。

そして、三番目、「返す」ことにつなげることが必要なのだ。「今までの分」「これからの分」、私達が大災害を経験し、学んだこと、活かしたこと、失敗したことなど、全てを他の人の役に立つように使い、恩を返すのだ。

資料を読んで、文化は違っても「思いやり」や「助け合い」の精神は、どこにでも同じく存在していることを知った。文化や国境を越えた思いやりや助け合いの輪は、無限に広がると思う。そしてそれは今、私達がやらなくてははいけないし、私達が広げていくべきだと考える。